思春期保健の充実を図るためのシステム化

―― 高等学校の保健室を中心として ――

田口つね　（千葉県立幕張西高等学校）

思春期にある高校生は、生理的には、二次性徴の発現を経て、成熟期への移行による激動期に当り、心理的には、自我確立のための動揺期、社会的には、主体制を確立する過程での短絡行動期にある。最近の社会環境の変化、特に子育ての基礎といえる家庭の機能の低下が、高校生の心理的、社会的面に大きな影響をもたらして、精神的耐性や社会性の習得を弱め、親からの独立を遅らせる「幼児化現象」の傾向を招いているように思われる。

1.　高等学校の保健活動（保健教育、管理）の現状

高等学校においては、思春期にある生徒の生理的、心理的及び社会的特性をふまえ、校長を中心に、校務分掌等により養護教諭、保健主事、生徒指導主事、ホームルーム担任など、それぞれの立場から、生徒の心身の健康の保持増進を図るための保健活動が展開されている。またこれらの効果的保健活動を進めるために、「学校保健センター」として、保健室を機能させている。そして、その機能は、およそ、図1のように考えることができる。

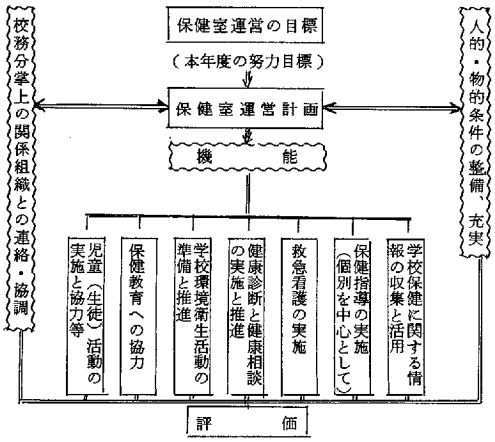

図1　保健室の機能

しかし、一般的に高等学校では、教科指導中心の学校経営がなされがちで、生徒指導、保健指導などの面では、必ずしも全教師による有機的な保健活動が展開されているとはいいきれないのが現状のように思われる。

2.　健康情報の一元化と統合的な保健活動

思春期にある生徒の心身の健康状態は、複雑多岐で個人差も大きい。従って、集団を対象とした保健活動は勿論のこと、個別の保健指導や管理に際しては、すべての関係者がもつ多種多様な、生徒個々の健康情報を一元化し、相互に連携を図りながら統合的保健指導管理をすすめる必要がある。健康情報の一元化と統合的保健指導、管理を進めるには、その機能から考え保健室が最も適切なのではなかろうか。保健室が中心となり、ひとり、ひとりの生徒を大切にして保健指導、管理をすすめ、家庭はもとより、地域社会と一体になった機能的な組織化を図ることこそ、思春期保健の最大の課題と思われる。

これらをまとめると、図2のようになる。

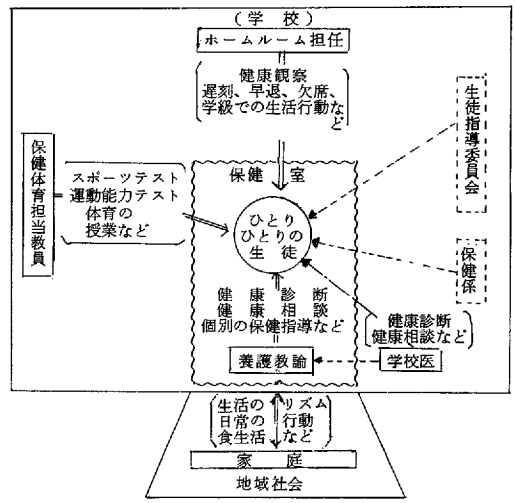

図2　1人1人の健康を大切にする健康情報の一元化と統合化

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

思春期にある高校生は、生理的には、二次性徴の発現を経て、成熟期への移行による激動期に当り、心理的には、自我確立のための動揺期、社会的には、主体制を確立する過程での短絡行動期にある。最近の社会環境の変化、特に子育ての基礎といえる家庭の機能の低下が、高校生の心理的、社会的面に大きな影響をもたらして、精神的耐性や社会性の習得を弱め、親からの独立を遅らせる「幼児化現象」の傾向を招いているように思われる。